きよさと

No.48
2009.10.20発行
社会福祉法人 清郷会
協和厚生園
日吉厚生園
九十九荘
十倉厚生園
TEL. 0476(93)1535(代)

（協和厚生園）

（日吉厚生園）

題字　日吉厚生園　清水昌弘さん

目　次

特集『大災害からいのちを守れるか』……2～3
日吉厚生園『Let's かかりかつどう』……4～5
十倉厚生園『オープンな施設を目指して』……6～7
協和厚生園『新型インフルエンザ』……8～9
九十九荘『あ・る・ば・む』……10～11
ご寄付・御礼など……12

清郷会のホームページアドレス　http://www.kiyosatokai.or.jp

ご意見・ご感想をお聞かせ下さい。

防災特集

大災害から命を守れるか

いつか必ずやってくる

今年になって群馬県の高齢者施設「たまゆら」の火災死亡事故、山口県の特別養護老人ホームの豪雨土砂災害と、高齢者施設の大きな被災が続いています。

二〇〇四年十月の新潟県中越地震では、高齢の方や障害を持った方達も否応なく、震災し仮設住宅などでの生活を強いられたと聞きました。

八月には静岡県を震度六弱の地震が襲い、阪神・淡路大震災のニュースは忘れられぬ記憶として私達の胸の内に残っています。

災害を目の当たりにした時、冷静に行動し被害を最小限に止めるためにも、日常の中で「いつか必ずやってくる災害」について考える機会を持ち、心と体の準備をしておくことが大切なのではないでしょうか。

当法人の各施設でも避難訓練や防災備品の備蓄など、災害に対処できる環境作りや意識改革を目指して取り組んでおります。その取り組みを紹介しながら皆さんと一緒に「防災」について考えることがこの特集の願いです。

忘れられない日

協和厚生園　施設長　田沼　貞美

四十年以上前の話になるのか、片時も忘れたことはない。忘れられないことが起こってしまったあの時から…。

独身時代を過した施設での一日は私のすべてであった。日が暮れるまで利用者さんと遊びに興じ、大盛りの食事を平らげ、日常のどのような場面でも、利用者さんの安全に気を配っていた毎日だった。

二月初旬の寒い日。朝礼で「火事には気をつけよう。」と話をしていたのに何の役にも立たなかった。その日の夜、施設は火に包まれ五人の尊い命は失われたのだった。

逃げ出した人たちの避難場所を設定したが、誰が居て、誰が居ないのか、混乱したまま時間は過ぎていき、逃げて側に居たはずの人が突然、斜面を駆け下り、林の中を逃げ回っている姿が目に入った。興奮していて追いつかない。興奮して火の方へ走っていったという話もあった。ＮＨＫや各新聞社の介入など、パニックと混乱が続いた。

同時期、他県では高齢者施設などで火災による死亡事故が起き、耐火建築やスプリンクラーの設置などが現在の基準に変更された。

平成二十一年度版『防災白書』は、「災害を取り巻く自然的、社会的な環境が変化する中、これまでの統計や経験則が当てはまらないような災害が発生した際に従来の対応では被害が増大する可能性もでてきている。」と述べている。更に「近年は、短時間強雨の増加、海面上昇など自然現象の変化、都市構造・社会環境の変化に伴い新たな防災上の課題も発生。」と言う。

備えあれば憂いなし

様々な災害に対応すべく、当法人の各施設では防災倉庫を完備しています。毛布・懐中電灯・電池などはもちろん、野戦釜やサーチライト・発電機など大掛かりな物まで、多くの命を救うべく、最低限必要だと思われる備品が備蓄されています。この備品は定期的に点検するだけではなく行事の時に使用するなどして、いつ災害が起こっても良いように日頃から準備をしています。

ただの訓練にならないように…

私たちが取り組んでいることの１つに避難訓練があります。非常ベルが鳴ってから、職員の誘導のもとに利用者の皆さんがグラウンドへ避難します。皆、本番を想定しながら素早く安全に「避難」することを目指しています。地震を想定した訓練ではすぐ外へ飛び出すのではなく、１度、机の下で状況を伺ってから避難することを体験しながら学んでいます。しかし、「地震なのに窓が開いていない」「火災なのにタオルを持っていない」など基本的なことが抜けてしまったり、夜間に災害が起こったら同じように避難できるか？その他にも毎回、色々な課題が残るのが現状です。「ただの訓練」にならないよう、実際の災害で起こりうることを職員一人一人が予測をしながら取り組み、お互いに意見を出し合っていければと思います。

福祉施設の課題

状況の変化に戸惑い、訓練の際に避難が出来ない方や大きな音や高い音が苦手で非常ベルが鳴った際にパニックになってしまう方に対して、どのように誘導したらよいのか？また、車椅子やストレッチャーでの避難経路をどのように整備していくか？など、施設特有の防災の難しさがあります。

新潟に学ぶ

新潟中越地震の際、施設では日頃の避難訓練の成果が発揮されたほか、グループホームでもバックアップ施設との協力体制がしっかりできていたとの報告があります。一方、作業所では避難訓練が徹底されていない所があったり、在宅障害者の緊急時の携帯電話での連絡網の整備がされていなかったことが挙げられました。

このような体験談を元に、改めて自分達の防災のあり方について考え、不十分な部分を見直していく必要があると思われます。

ゲリラ豪雨が多発し、集中豪雨や土砂災害などへの不安が高まる中、一方では自治体が水害などによる大規模な被害を予測して作成した地図『ハザードマップ』の認知不足が浮き彫りとなっている。

九州北部で七月下旬に十二人の犠牲者を出した豪雨災害でも、福岡・佐賀・長崎の三十六市町村が計三十四万人以上を対象に避難勧告を出したが、約九十六パーセントの住民が避難していなかったことが、実態調査で明らかになるなど、防災への認識に甘さを感じる。

新潟中越地震を経験した新潟県魚沼学園の地震報告書では「災害弱者の利用者への影響の大きさを痛感している。自身の状況を理解できず、園舎へ必死に戻ろうとする人、興奮する人、慣れない環境に不調を訴える人、プライバシーが満足に確保されず不満を訴える人、イライラで喧嘩をする人がいるが、避難所で地域の人と一緒に生活することもできず支援の限界を感じる。この十日間、利用者と一緒に余震の不安に耐え、車中・テント・体育館と慣れない環境の中で生活した。そして状況は停電、電話不通、発電機使用、ガソリン不足により車両のガソリンを抜き取る。便所用水は川の水、飲料水は近くの集落の湧水を用いた。」とある。

被災の報告、私が体験したこと、現実は想像を超えて厳しいものとなる。

当法人の防災のハード面は充分過ぎる。しかしながらソフト面はどうだろう。電話が通じない時、トイレが使用できない時、けが人をサポートする時、家族への連絡は？、駆けつけられない職員は？、備蓄品の内容と保管場所は？、数えきれない程、真剣に取り組む課題がある。今すぐに施設内の安全・危険箇所を把握し、人任せにできない「いのち」を担ぐ責任を感じ、定期的に実践的な防災訓練を実施して、応急時に〝自然に体が動く〟ようにしておかなければならない。

日吉厚生園

Let's かかりかつどう

今まで、ひまわり会(利用者さんの代表者会)の活動は、何度か取り上げてきましたが、今回は、日吉厚生園全体（利用者さん全員）での取り組みをご紹介したいと思います。

利用者主体の活動を目指して

加藤静江

日吉厚生園では「ひまわり会」という利用者の代表者会が結成されています。利用者さん一人ひとりの投票により、役員が選ばれ、役員は皆の代表として、話し合いに参加し、選択行事の企画や新聞づくりなどの活動を中心に行っていました。個人だけの考えではなく、全体のためにどのように意見をとりまとめてゆくか、そうしたことを「考え」「話し合い」「意見を述べる」といった力を身につける取り組みでもありました。さらに一歩、全体での主体的な運営を目指して、係活動を新たに始めました。役員だけでなく、全員が係に所属し、役割を分担する事で、「皆の力で園を良くしていく」「自分達の事は自分達で行う」という利用者主体の活動を目指す試みです。

係活動を組織するにあたり、まず役員が「どんな係が必要になるか」「どのように取り組んでいくか」を話し合うことから始めました。それまで議題とされてきた行事の行き先などの話し合いとは異なり、係の活動内容についてはなかなか理解しにくいところもあり、意見を述べることはとても難しいようでした。それでも話し合いを積み重ねることで、少しずつ意見が出され、一つ一つの係の仕事内容を決めることができました。それをもとに、どの係になりたいか利用者一人ひとりに希望をとり、その結果を係活動のメンバー表としてまとめ、全員の了解が得られるように利用者会(全体集会) も開かれました。

そのようにして始まった係活動でしたが、形だけできて、取り組みが難しいという状況にあります。通常の日課のなかで、自由に活動できる時間は限られており、作業に支障がないよう活動時間を昼休みに設定したのですが、その時間はサポートをする職員も食事介助や歯磨き支援などで係の支援をすることが十分にできませんでした。「ひまわり会」にてどうすれば継続して取り組んでいけるかと話し合いを繰り返し、検討しました。その結果、係の種類を取り組みやすいものに縮小し、活動時間を各作業班の日課の中で都合のいい日時に行うなどの見直しを行いました。現在、給食係（毎日の給食メニューボードの写真カードを交換し、掲示する）は、職員からの声掛けがなくても時間になると率先して取り組む様子が見受けられるようになり、利用者主体で行われつつあります。

他の係では、月1回ずつの実施で回数が少ないせいか、利用者・職員側の意識が薄れてしまうなどの課題が残されていますが、諦めずに「サポート」を続けていくことで、より主体的な活動につながると考えています。

利用者会

- **ひまわり会役員**
- **給食係**（給食メニューボードを交換・掲示する）
- **洗車係**（車をきれいにする）
- **美化係**（園舎内をきれいにする）
- **花だん係**（花だんの水やりをする）
- **本の整理係**（本棚の整理をする）
- **ボード係**（スポーツ・サークルのメンバー表を掲示する）

ラウンジにある本棚。利用する方が多くて整理が大変です。

みなさんのこえ

■漢字が難しかった。（見本のメンバー票を見ながらホワイトボードに名前を書いていく）読めない漢字は職員に読んでもらって、ひらがなで書いた。（ボード係さん）

■職員と一緒に更衣室の掃除をやった。掃除機をかけて、雑巾で拭きました。鏡も窓もきれいにしました。難しいところはなかったです。ピカピカです。（美化係さん）

行事　野外活動

毎年7月に実施している野外活動。今年のテーマは「自分たちで作って、みんなで食べよう。」

利用者さんが中心となり調理を行えるよう準備を整え、職員はあくまでもサポート役に。自分たちの作った料理の感想は、もちろん「おいしい」でした。

7月10日　わくわくの西の城

焼きそばとバーベキュー
５つのグループに分かれて行いました。
同じ材料で作ったのになぜか違う味に。これぞ、手作り。どのグループも美味しかったです。

7月3日　佐倉草ぶえの丘

お好み焼きとニョッキ
行きの車の中から「ニョッキって何？」と質問が。聞かれた職員もよくわからず「・・・」初めて作ったのですが美味しく出来上がりました。

浩養小の子どもたちと深まる交流

富里市立浩養小学校との交流は十倉厚生園開設当初（平成十一年度）から既に始まっていました。当時浩養小の４年生担任だった下川先生（現酒々井小）より知的障害者の方と交流を育む事により生徒の「人を思いやる心」を養ってもらいたいとの申し出があり、十倉厚生園としても地域の小学生と交流を持てるということはとても意義あることだったため快諾したことが始まりでした。当時は、芋掘りが中心の年数回程度の交流でしたが、年月を重ねるにつれ小学校からの招待もあり、今では年十二回ほどの交流を持つまでになりました。基本は四年生が交流学級となるので毎年交流する生徒さんたちは変わっていきます。

年度始めの交流では明らかに表情を硬くし接し方に戸惑っていた生徒さんたちも交流を重ねた年度末には自分から笑顔で利用者さんたちの手を引いてくれる姿に何度胸を打たれたか知れません。歴史を重ね初年度の生徒さんが今はもう二十歳前後。実習生や職員として現れてくれたりすることを夢見ながら今後も交流を重ねて大切な関係を育てていきたいと思います。

（支援員　加藤　嵩）

いよいよスタート。緊張するなぁ。

小学生と協力してデカパンリレー。

主な年間スケジュール

５月	芋苗植え・草むしり
６月	人形劇招待
９月	運動会招待
10月	芋掘り（3･4年生）
	収穫祭ステージ（6年生）
12月	マラソン大会招待
	６年生スポーツ交流会
	（ソフト・キックベース）
３月	６年生を送る会招待
	交流レクリエーション招待

十倉厚生園
オープンな施設を目指して

十倉厚生園は、平成11年4月の開所以来、丸10年の歳月が経過しました。当時から勤務している職員は振り返ると、感慨深いものがあるのではないでしょうか。

施設の成長・発展においては、地域の方々をはじめとする関係者の方々のご理解とご協力を抜きにして語ることはできません。皆様には心から感謝するとともに、「これからも何卒よろしくお願いします」という気持ちでいっぱいです。

十倉厚生園ではこの10年間、「十倉を知っていただき、理解して頂けるよう」にといろいろな行事や活動を行って参りました。これからも継続していくことで、最終的に利用者さんへの幸せに繋がることでしょう。

社会への取り組み

年間五十名ほどの実習生受入れや、家族のご協力で行っている管理宿直。常に外部の方が施設内にいる環境。マンネリ化や俗に言う「施設の常識」は十倉では通用しません！また、ジャスコイエローレシートキャンペーンへの参加や地域の業者からの委託を受けた作業、地域での社会体験実習や福祉ショップの運営補助等、利用者さんの支援はもちろんのこと、地域の方に知ってもらう機会を多く持つことを意識しています。

施設開放

週末の夜になると、デイサービス棟に明かりが点り、なにやら楽しげな音楽が…。地域のダンスサークルにフロアを貸し出している為です。直接的に利用者さんと触れ合う事はありませんが、施設の雰囲気を感じる良い機会になっているようで、このようなお付き合いがきっかけとなり、大きな行事ではボランティアとして参加して下さる団体もあります。

また、相談支援事業の一環で、月に一～二回マザーズホームを利用されている方達が、利用者さんが飼育しているポニーに乗りに来ています。

ダンスサークルの皆さん

地域の方々との行事

８月に行われている「納涼ビアガーデン」では、日頃からお世話になっている十倉四区の方々をお招きし、テーブルを共にしたり、ゲームやカラオケに利用者さんと一緒に参加していただいたりし、交流を深めています。

地域の方と利用者さんでの、二人羽織りです！

約８００人参加の大抽選会

10月に行われている「収穫祭」は、千人を超える大規模なお祭りです。地域の和太鼓グループ・ダンスチーム・バンドにもステージ出演として参加して頂き、それを更に地域の方が見に来るという具合に、毎年参加者はうなぎのぼりなんです。

協和厚生園

新型インフルエンザ流行せず

新型インフルエンザが世界的な流行を見せている。日本でも秋冬の本格的な流行シーズンを前にして、全国的かつ急速なまん延を見せ、感染者は増える一方で、感染者死亡のニュースを見るたびに恐怖を感じる。

幸い、九月中旬現在、協和厚生園では感染者は見られない。『新型インフルエンザ対応マニュアル』を基に、全国的な感染の広がりを受けて、手洗い・うがい・園内消毒がさらに強化され、緊急を要さない外出等は原則的に禁止となった。

管理職の迅速な対応と指示、それに応える支援課・厨房職員。そして何より、新型インフルエンザへの予防・対応法から、六十名の利用者の命を守るべく日夜、努力と激務を重ねた一人の看護師の存在が無ければ、もうすでに感染者が現れていてもおかしくはなかったように思う。

そこで今回は、今年六月に新規採用されてまもなく難題を抱えることになった廣岡梨江看護師に新型インフルエンザについて、協和厚生園の医務事情を踏まえて話を聞いてみた。

若さとガッツで、笑顔を絶やさず、家庭と激務を両立する廣岡看護師。

全員感染

一人の利用者でも新型インフルエンザに感染した場合、集団生活の中で完全に接触を避けるのは難しく、全員に感染する可能性が高いと考えています。

早期発見・対応

利用者さんの病気への認識が少ない中で、被害を最小限に抑えるためには「早期発見・治療・対応」が大切です。毎朝の検温など職員の日々の観察が重要となってきます。

早期発見・対応ができれば個室などでの隔離対応・管理していくことも考えますが、その際は、対応する職員が媒介者とならないように、注意しなければなりません。

職員の健康管理

現在、利用者さんの外出などが限られているので、職員が感染源となり、媒介者となる可能性は十分に考えられます。自分自身はもちろん、大切なご家族や利用者さんに感染することがないよう、健康管理・予防を徹底することが必要です。

重症化

利用者さんの高齢化に関係なく、基礎体力の低下に伴う重症化が大いに考えられます。早期発見・治療・対応により、合併症を防ぐことが重要だと考えます。

予防法は…

手洗い・うがいは欠かせません。毎食前や外出後だけでなく、例えば起床時や就寝前など一日何回も行って欲しいと思っています。

その他、基礎体力の向上や健康管理、もちろん職員の健康管理や感染リスクへの認識が大切です。

引き続き、手洗い・うがい・ジェスパ消毒等による施設内の衛生管理や、お部屋の換気などに努めて下さい。

協和の医務事情

利用者さんの高齢化に伴い、ほぼ全員の方が通院を要し、中には一人一疾患では止まらず、いくつもの持病を持つ方も多く見られます。

現状では、医務の仕事である『健康管理』『予防』『治療（厳密に言うと治療行為ではありませんが）』に加えて、精神面などいろいろな面での配慮が必要となってきますから、支援課職員の協力がなければ到底できません。

利用されている方や職員の方たちと一緒になって、病気と根気強く戦い、園での生活がいつまでも一人ひとりにとって、安心安全なものとなるようお手伝いできたらと考えています。

協和厚生園 TOPICS きょうわの輪

地域交流行事「夏祭り」

８月８日に協和厚生園・日吉厚生園のグランドで開催された『夏祭り』。

当日は大勢の来客者で会場は大賑わい、日吉台商店会からの出店やゲーム、模擬店、チャレンジコーナー、ゲーム大会なども大盛況でした。

舞台上では下総栄太鼓の迫力ある演奏やレッドジンジャーのフラダンス、富里北中学校の吹奏楽部、ダンスグループ「D’s Cool」がお祭りを盛り上げてくれ、大成功で幕を閉じています。

富里北中学校交流会

準備体操を行うが、中学生の皆さんの動き・表情が固い。中学生にとっては初めての場所・経験、しかも準備体操がアンパンマン体操では致し方なかったか。

手をつないでの大玉転がし、合同２チームで行った玉入れを行う頃には、双方に笑顔が見られるようになり、利用者さんに自ら声をかけ、手を引いてくれる姿も…。

“手をつなぐ”ことが、遠かった距離を縮めてくれた。富里北中学校との交流が始まった、記念すべき１日である。

富里北中学校教諭岸先生インタビュー

すぐ側にありながら、なかなか交流の機会がなかった協和厚生園と富里北中学校をつなげてくれたのは、ある一人の先生だった。

北中との交流行事では中学一年生の生徒を、夏祭りでは吹奏楽部の生徒を引率してやってきた岸先生。

背が高く、メガネの奥に光る瞳には強さとやさしさが…。

「芝生がきれいだな。心が落ち着くな。」

それが第一印象でした。

自分達の勉強の場として考えていましたが、田沼施設長から「いろんな人がいて良いのです。」というお話をいただき、お互いに「楽しい時間を一緒に過せた。」と思える機会になればいいなと考えるようになりました。

生徒達には「何かしてあげる」という活動ではなく「実際に交流の場でどう感じたか。」を経験することが大切だと思っています。いろいろなことに気づくことが大事で、その中で自分にできることから行動できるような人になって欲しいと考えています。

今回は初めての経験ということもあり、予想以上に動けなかった、なかなか話しかけにくかったという声もありましたが、不安や戸惑いもあったでしょうから致し方ないと思っております。

この経験を生かして、行く行くは生徒主体の積極的な活動にしたいと考えております。本校にも特別支援学級が2クラスありますので、その生徒達との交流にも、これから生かしていきたいと思っています。

生徒さん達の声

- 話すのに時間がかかったけど楽しかった。
- 大変だったけど楽しかった。
- 自分たちの生活が当たり前だとは言えないことを感じた。

スイカロードレース

ガンバレ～

納涼祭

あははっ

ソレソレ

特別養護老人ホーム　九十九荘

きよさと芸能祭

唄って　踊って

思い出のアルバム

写真撮影

景品ゲット！

プリウスがやってくる

このたび『郵便事業株式会社』様より、平成二十一年度年賀寄付金助成事業として、CO2の減少に取り組んでいる団体が、環境へ配慮したエコカーを導入する場合、優先的に助成していただけるとのことにより、法人として日頃よりオーシャンブルーによるグリーンカーテン、グラウンド及び建物周辺の緑化等の実績を踏まえて、申請しましたところ、五月十八日付をもって内示があり、トヨタプリウスを購入することとしました。

この車両は利用者の通院、買い物、学習、外出等の送迎車両として活用する予定です。

郵便事業株式会社の皆様に謹んで感謝の意を表します。

一、事業名　環境対応車両・エコカーの整備
一、事業内容　トヨタプリウス
一、総事業費　二百三十七万五千円
一、配分額　百七十万円
一、施設名　協和厚生園
一、完成　平成二十一年十月三十一日(予定)

ご寄付お礼

○　日吉倉カラオケ同好会
○　TDK株式会社成田工場
　　TDK労組東日本本部

故　武藤覺次氏の訃報報告

法人の役員でもあり十倉厚生園の職員でもあった武藤覺次氏が、本年七月一七日に享年六三歳の若さで永眠致しました。ここに謹んでご報告を申し上げます。

武藤覺次氏は、社会福祉法人清郷会十倉厚生園の設立に向けて、当法人に一万二千平米もの敷地を無償提供して下さり、平成十一年四月の開所より二年間勤めた協和厚生園から十倉厚生園の作業主任として異動し、以後デイサービスを含めて利用者の生活・作業活動の支援に努めて戴きました。

昨年の春、癌が見つかり完治を願いながらの闘病生活と仕事を続けて参りましたが、その甲斐なく残念な結果となってしまいました。当法人常務理事三橋輝男が告別式の弔辞の中で「武藤覺次無くして十倉厚生園無し。」と述べました。私もその通りだと思います。

ここに改めましてご報告を致し、その功績を称えると共に、氏のご冥福をお祈り致したいと思います。

「武藤さん、ありがとうございました。」合掌。

十倉厚生園　施設長　三木康雄

職員の異動

退職者
佐藤三枝子（協和厚生園）

新規採用者
廣岡　梨江（協和厚生園）

あとがき

息子が保育園へ通うことになった。嫁さんが再び仕事をするためである。息子もようやく私を遊び相手とでも感じ始めたのか、馴染み始め楽しいながらも、保育園通いと仕事の忙しい毎日。

そんな折、先日、関東地区職員研究大会(東京大会)へ行かせてもらった。

「よし。久しぶりにたくさんお酒を飲むぞ。羽を伸ばすぞ。大都会を堪能するぞ。」

と密かに心に決めて、心躍る思いで出発したのだが、意外というか、お酒の席より分科会での話が一番楽しく、心に残る思い出となった。確か…

「利用者の心の声に気づいているか。利用者のニーズに基づいたサービスを提供できているか。」

といった話であった。

聞けばその講師は、相談支援分野のカリスマと呼ばれているとか…確かに小ネタを常に盛り込む話術とその熱意で、居眠りすることも、途中で大都会新宿へ抜け出す計画も忘れさせた。

「入所施設では個別支援が嫌がられる。集団生活だからという理由で、職員の手の平にのせるような決められたサービスしか提供できない。それでは時代遅れである。」

と話した後に…

「このことは職場に帰ってから話すと、特にベテラン職員に嫌われることもありますから注意して下さい。」

といった具合である。

手前ミソながら私の勤める協和厚生園は個別支援ができていると思っている。がしかし、完璧であるか、すべての利用者の思いに応えられているかと自問自答してみる。

「まだまだ改善すべき余地、努力すべき所があるのじゃないか」から始まって「いや完璧なんてありえるの。」「幸せって何？」「我慢があるから幸せを感じられる？」とついつい自分に都合よく考えてしまう。

考えれば考えるほど「この仕事の正解って何だろう。」「より求められるものは専門性より人間性なのではないか。」と思えてくる。正解のない福祉の仕事で、幸せという答えを見つける難しさ…

人間性に自信のない私が今、思うのは父親としても、施設職員としても、相手の本音（ニーズ）を知らずして、その人の役には立てないのではないかということである。

《研修報告》

『ダメ親父でも息子の本音ぐらいは知っておきたいと思った。』